長洲町立長洲小学校　校長便り　No.１２

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和４年５月３０日(月)

運動会の学びを活かす

運動会は保護者の皆様を始め、多くの方々に支えられ、成功裏に終わったことを大変嬉しく思います。

さて、この時期には運動会が終わり目標が無くなってしまって、少し心に穴が空いてしまった感覚に陥ることがあります。そうならないために何が必要かというと、学んだことを次のステップへ活かしていくことです。運動会の勝ち負けだけに拘り過ぎて「負け」を経験すると、やる気が出なくなったり、次の目標を見出せなくなったり、その事が原因でルールを守れなくなったりすることがあります。所謂、燃え尽き症候群というやつです。

私はこれまでの取組を見ていて、子ども達の大きな成長を感じています。特に６年生は期待値以上に成果を上げてくれたと思います。勝ち負けに関係なく、お金では買えない貴重な経験だったはずです。

閉会式の時、６年生数名の児童の目には光るものがありました。メンバーの殆どが達成感を感じていたようです。これまでの取組が「帳面消し」ではなく、本気だったことの現れだと思います。勝つことも目標の一つですが、負けて得るものも大きいのです。閉会式の時、教頭先生の講評の中に「運動会で学んだものを、これからの生活で活かしてください。」と述べられました。６年生はこの運動会で集団をまとめることの大切さや難しさ、やり遂げることで得られる達成感や充実感も味わったことでしょう。それを良き伝統として下級生に伝えてほしいと思います。

６年生は今後の目標として、何を設定するのでしょうか。「修学旅行に向けて?」「卒業に向けて?」色々あるでしょう。次のステップに向けてのスタートです。

最近の社会④

さて第４弾です。

⑥自分の考えは“絶対”？

「我が道を行く」、なかなか格好良く見える、聞こえるものですが、これで他人に迷惑を掛けるようなことがあってはなりません。自分の考えを“絶対”として通していくのは単なる“わがまま”です。我々の教師という職業は、この点についてはいつも気をつけておかなければなりません。私はできる限り多くの人に意見を聞くように努力しているところです。自分の理想を追い求めるのは大変良いことです。しかし理想しか見えなくなってしまってはだめです。また、「うちに限って…。」という考えは極力避けていきたいものです。学校で何があった時に、子どもを守ってあげられるのは最終的に担任や保護者の皆様ですが、状況を客観視できないのはいけません。たまには突き放して、自分で乗り越えさせることも必要であると感じています。

⑦先輩の意見が素直に聞けない

まず「はい」、おわりに「です」。これは私が学級担任をさせて頂くときは、必ず掲示していた約束事です。私は学生の頃、部活では監督や先輩の言うことは絶対でした。それが良いことであれ悪いことであれ、まず返事でした。最近、目上の人達に対する敬愛の念が無いように思います。特に若者はそうで、その中でも教師と児童生徒、親と子…等々がそうです。私は縦の関係を重んずる環境で育ったので、「はい」という返事に抵抗は無いのですが、大人であれば、何か言われた後に「でもですね…」、子どもであれば「え～～～っ」というのが最近の返事でしょうかねぇ。私だけではないはずなんですが…。まず「はい！」を実践し、気持のよい日常生活を送りたいものです。

シリーズ「自分を語る」#１２

５年生になると更に行動範囲が広がり校区外も何のその、自転車さえあればどこまでも出かけて行く澤田少年。５・６年生の時の担任の先生は初任の先生だったのですが、企業に就職した後、教職の道を諦めきれずに採用試験を受けられたという熱血先生でした。

５・６年生というと、思春期の入り口といいますか、何となく異性も気になってくる頃でしょうか。私はというと、５年生の頃っていうとまだそういったことには興味がなく、野球とプラモデル作りに明け暮れた毎日でした。この頃も新設校ならではのエピソードがあります。当時、麻生田小学校にはプールがありませんでした。そこで、麻生田小学校の児童はどこに水泳学習に行っていたかというと、民間のプールです。先般の私の事件に出てきた「新地プール」です。そこまで歩いて行くんです。当然、午前中は移動と水泳学習で時間が過ぎていきます。水泳学習後ってちょっと涼しかったりするのですが、私たちは違いました。汗だくで帰ってきて、給食準備をします。そして、メニューに「うどん」なんかが出てくると、あまりの暑さに、牛乳瓶（私達の頃は牛乳は紙パックではなく瓶でした。）に水を入れて飲む者もいました。何をしていても楽しかった時代です。

５年生の頃も、印象に残っていることはたくさんあります。まずは、虫取りです。クワガタばかりですが、近くにあった「岩倉山」は、山というよりは「丘」でそんなに高くもなく、私たち小学生にとっては格好の遊び場でした。夏休み中はラジオ体操の後、数人で連れ立って岩倉山へ走っていきます。自転車で行くと、他の仲間が親に言いつけるからです。だから、私たちは“こそっ”と岩倉山に行きます。ポケットの中には山遊びに欠かせない“肥後守”を忍ばせています。現場に着くと、程よいクヌギの木を蹴ります。すると近くで「かさっ、かさっ」と、落ち葉の上にクワガタの落ちた音がするのです。そっとその場所に行くと「ノコギリクワガタ」がこちらを見て威嚇しています。楽しかったんですよ、この瞬間が。そして、虫かごを持って行っていない私たちは、クワガタを帽子の中に入れ、それをひょいと被ります。すると、クワガタは帽子の中の折り返しの部分に引っかかって逃げられず、帽子の中でもぞもぞ動き回ります。これが私たちにとっては快感でした。「うわ～っ、たくさん捕れた～。」っていう達成感です。今の子ども達にはできない、昭和の子ども達の芸当ですね。虫嫌いの子ども達にとっては鳥肌が立つ様な芸当です。

家に帰ると「何ばしよったつね！」とげんこつをくらうのですが、その前に帽子は取っていますし、母もどこに行ったかは見当がついていましたから、「朝飯前の運動たい。」と屁理屈をこね、母も「はよ、ご飯ば食わんね！」と朝から威勢のいい会話が繰り広げられていました。今では、ラジオ体操も数えるほどしかありませんし、その後、遊びに行こうものなら、警察のお世話になることだってありますね。子どもらしい冒険ができないというか、世知辛いというか、今の子どもたちは可愛そうな気がします。　（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　　可　・　不可　）

運　動　会　特　集